

年間第五主日

2015.2.8

マルコ：1:29-39

一週間が過ぎて、今日は年間第五主日を迎えています。先週の主日の福音では、カファルナウムの会堂でイエスが行われた御業が語られていました。イエスが語られたことを聞いた人々は、イエスの教えが持つ権威に打たれて、「これは一体どういうことなのだ。権威ある新しい教えだ」と論じ合っていると語られていました。なぜ人々がそのように受け止めたかという、イエスがその場にいた悪霊に取り憑かれた人から悪霊を追い出されたからです。「この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く」と人々は驚嘆したのでした。イエスは律法学者のようにではなく権威ある者として教え、その教えは悪霊さえもその言うことを聴くほどの権威を持っていたからです。こうして、「ときは満ち、神の国は近づいた」と宣言された神のもとから遣わされたイエスのメシアとして活動が開始されたのでした。先週の福音で聴いた、安息日のカファルナウムの会堂のエピソードは、そのようなイエスの活動の開始を告げていたのです。「人の子は安息日の主である」と言われるイエスは、その活動の開始に当たって、この世に神のあわれみの裁きを実現する天から来られる人の子としての権威をもって福音を宣言し、我が物顔にこの世を支配している悪霊を追い出されるのです。イエスのその評判はガリラヤ中に広まったと先週の福音は締めくくられていました。

カファルナウムの会堂の礼拝をもって始まった安息日は、今日の福音の場面が続いています。イエスに呼ばれてその最初の弟子となった、ガリラヤ湖の漁師であったペトロとアンデレ、それにヤコブとヨハネの兄弟はイエスを伴って、シモン・ペトロの家に向かったのでした。そこには、シモンの姑が折悪しく熱に冒されて寝込んでいたと語られています。弟子たちは、イエスにヤコブとヨハネの家に移っていただくことはせず、シモン・ペトロの姑が病の床についていることをイエスに知らせたのでした。イエスは早速彼女の病床に近づいて彼女の手を取ってくださったのです。するとたちまち熱は去って彼女は一行をもてなしたと語られています。悪霊に取憑かれた苦しみの中にある人から悪霊を追い出されたイエスは、熱を取り去って、熱病に苦しんでいたシモン・ペトロの姑を立ち上がらせてくださったのです。会堂で示された権威をもってイエスはシモン・ペトロの家を訪れ、イエスをお迎えする支障となっていたことを取り除いてくださったのです。シモンの姑は起き上がって、イエスとその一行を接待することが出来たのでした。イエスをお迎えするのに都合の悪いときという

ものはないのです。むしろ、イエスをお迎えすることによってあらゆる支障の口実を取り除かれる結果となるのです。

フランシスコ教皇様の招きに応じて今年の秋、ローマで家庭をテーマにしたシノドスが開かれることになっています。教皇様のこの呼びかけは全教会に向けられています。わたしたちはこのような教皇様の呼びかけにどのように応えたらよいのでしょうか。最も根本的なことは、現代の世界が抱えているこの世の価値観をもってわたしたちを縛っている悪霊の縄目から解放されることを目指すべきであると思われまます。この世の価値観が優先されるあまり、最も大切にされるべきことが後回しにされているのが現状ではないでしょうか。将来の経済的安定を求めて、進学競争が低年齢化し、お互いの思いやりが育つことなく、いじめや引きこもりによって蝕まれている子供たちの心をどのように育ていったらよいのか、今の日本が直面している大きな課題です。超高齢化と言われる社会の中で、行き場を失った高齢者をどのように支えて行ったらよいのか、差し迫った課題です。安息日の会堂での礼拝は、わたしたちの家庭が置かれている現実へと繋がっていなければなりません。イエスの弟子たちがイエスを伴って自分たちの家に帰っていったように、わたしたちをがんじがらめに束縛している悪霊からの解放を願わねばなりません。イエスの権威ある福音の教えがわたしたちの家庭の雰囲気にも風穴を開けることを願わねばなりません。創造主である神によって寄り添わせていただいたお互いの絆を確かめあわねばなりません。そのために聴いているはずのイエスの福音の教えを日々の生活の中で心に刻みたいと思います。

日暮れを迎えて、安息日が終わると、町中の人々が病人や悪霊に苦しむ人々をイエスのもとに連れてきたのでした。たそがれの闇の中に浮かび上がるその光景は、今のわたしたちの社会を覆う闇を象徴しているかのようです。どこに潜んでいるか分からないテロリストを恐れるように、わたしたちはお互いを警戒しあっているかのようです。これでは絆が結ばれることはありません。シモン・ペトロの家は、このような時代においても、イエスをお迎えしたことによって人々の拠りどころとなる力を秘めています。わたしたちの集いの場である教会が、この社会を覆う闇の中で暖かな光のともる憩いの場となることを願いたいと思います。

「人々があなたをさがしています」。一人祈るために朝早く人気のないところに出て行かれたイエスの後を追って、ペトロはこのようにイエスに声をかけます。わたしたちを取り巻く夜の闇が明けるために、曙を呼び覚ます祈りが必要

なのです。朝の光の中に立つイエスにつき従って、わたしたちもイエスが行こうとされている人々の住む生活の場へと出て行く覚悟を固めたいと思います。イエスの権威ある福音に耳を傾け、イエスが祈る祈りをともに祈って、イエスの御後に付き従うために、このミサをともに捧げましょう。わたしたちの心に受けた福音がわたしたちを通してわたしたちの家庭に、さらには、わたしたちのお互いの絆のありようがわたしたちの周りに広がって行くことを願って、イエスが求めておられる弟子たちとして、どこまでもイエスの御後に付いて行きたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高